

見返り燈籠（燈とぼし）

【平成17年6月24日 市指定 有形民俗文化財】

系島・早良方面から梶原峠を越え、牛頸、水城を經由して大宰府へ参詣する古道「さいふみち」の傍ら、梶原峠にさしかかる場所に建っています。神社仏閣ではなく交通路の常夜燈として使用された燈籠として、また自然の石を使用した石積みの燈籠としても、めずらしいものです。江戸時代に庶民の間で流行した大宰府参詣「さいふまいり」の古道を見守るこの燈籠は、古くからこの場所が交通の要衝であったことを示す貴重な資料です。



◀さいふみちの傍に佇む見返り燈籠
現在の燈籠は保護措置をして組み直しています。



～見返り燈籠の伝説と由来～

すがわらのみちざね

菅原道真に関する伝説が残っています。

道真公が大宰府に左遷された際、京から伴ってきた「おりき」という娘が道真の子を身ごもり、早良の脇山に退くときに道真のことが恋しく、幾度も大宰府を振り返ったことから「見返り燈籠」と呼ばれるようになったとか。

地元の人からは「燈とぼし」とも呼ばれています。

▲見返り燈籠の梅鉢の紋

ちゅうだい ひぶくろ

中台・火袋・笠が石組みの台座に載せられています。高さは約2m。

火袋の西面には梅鉢の紋が、東面には「享和三癸亥二月吉日上かじハラ村」の銘文が見られます。